

青森県における自由民権運動

稲葉 克 夫

はじめに

今から二十四年前、昭和三十九年三月十二日、私は東奥日報紙上に「忘れられた自由民権家―五戸村中市稲太郎について」を発表した。その後、野辺地町の角鹿忠四郎などを発掘して青森県下の自由民権運動の研究を深めようとしたがその後はさして研究が進まず、自由民権百年の昭和五十六年以降、肩身の狭い思いをしていた。東北・北海道で自由民権史をまとめているのは青森県だけである。それで五十九年から六十年にかけて、本多庸一ノート百枚を書いて自由民権運動史の中核をまとめたがまだ不十分である。今年勤務校を代えて日本史に集中できるようになったので、この機会を活かしたいと思う。今回はそのため一階梯としての点描を行ってみたい。

A、中市稲太郎のこと

中市稲太郎については明治十三年四月、青森県を代表して元老院に本多庸一と連署の国会開設建白書を提出したこと、五戸地方の教育界で活

躍したことしか分らなかった。ところがこの度、三沢市史編纂委員会の西村嘉氏が、八戸市鮫町より三沢市天ヶ森までの沿岸漁民の総代として内務省と大蔵省に運動している史料を発見された。「捕漁採藻税」の軽減運動である。当時県南は産馬組合事件で地主と自由民権家が県を相手に闘っていた。五戸はこの時官側と反官側に分裂し、中市の妻の実家、藤田重蔵は県側だった。中市は五戸を避けて浜の問題にむかったのだろうか。明治十四年七月五日、内務卿松方正義、大蔵卿佐野常民^①の不認可の通牒が県に到達し、運動は失敗した。

中市については、これまで息子の一郎が五戸御給人の士族復籍運動にかかわったので、そのイメージが重なって不平慷慨の徒でないかと思われていたが、今回の史料発見でさらに研究の視点を広げていかなければならない。

B、津軽豪農層の政治への目醒め

従来、当地は北辺であり近代化への歩みで遅れをとったゆえ、明治維新の変革に向かって起こる中央諸情勢の変化、惹起する事件の真相、とくに開国へ大転換した幕末外交などの情報には全く無縁で、もっぱら人々は飢饉におびえ、農民は年貢を納める道具、町人も不安定な身分を金力

でやっと支え、その一部が文人的遊戯の面で知的活動をしていたと考えられていた。

しかし幕末から明治にかけて黒石地方の豪農であった石名坂村の渡辺清助、上目内沢の浅原平治、浅瀬石村の北山彦作、馬場尻村の山口栄太郎、本郷村の鎌田勘三郎、それに異色だが、青森の船頭久保屋儀兵衛らの所有資料・行動から、先のみ方が固定観念にもなった誤りであることを知る。

以下それぞれ具体的な検討によって幕末の重要情報が今のわれわれの想像をこえて正確に、す早く伝達され、それを受容した農村の指導者である庄屋層の知的水準が、高度なものであったことを報告したい。

そしてそのことがやがてくる明治十年代の自由民権運動の急激な盛り上りの土台であること、自由民権運動が単なる開化思想の受けうりではなく、かかる知的土壌の上に展開されたものであることを強調したい。

(1) 石名坂村渡辺清助

石名坂村は黒石城下東南の山村、十和田湖近くに源流を持つ浅瀬石川に沿う河岸段丘上の集落、十四世紀既に存在していた古村、平泉の落武者佐藤氏が館主という伝承もある。

渡辺清助家は石名坂村の庄屋で石名坂、出石田一带に多い渡辺家の総本家である。渡辺清助の生没年は不詳、しかし彼が書き写した「奥州南部風説書」は弘化五戊申年の作品である。表紙に中庸子程子曰不偏とある。その意味するところはこの風説書が中正な立場に立っていることの強調で朱熹章句の中庸の徳、不^レ偏之謂^レ中也ととづく。原本・原著者につ

いてはまだ調べが及んでいないが、著者名の個所に「小野の小松」とある。そしてそのわきに「花の色は移りにけりな徒に」と小町の歌の一部が書かれている。大名、武士の権威が落ちたことのパロディとみる。渡辺清助が書き加えたとも考えられるが、もしそうであるならば渡辺清助は並の人物でない。

さらに、弘化四年秋におきた盛岡南部藩百姓一揆の内容の重さを考えると、この一揆について適確な情報を把握していた渡辺清助の村方指導者としての実力の程がうかがわれ、これが明治の近代化への重要なエネルギーとなったといえる。

本文の書き出しは「窮すれば乱るとかや、ここに奥州南部盛岡の城主南部大膳大夫從四位少將源利信公御領分ニ古今希なるの騒動ありその由来を尋ねるに頃者弘化四丁未十一月十八日の事成りしか」と名調子である。

筆はまず無用の支出ありと藩の政策を批判する。一揆は弘化四年十月二日の六万両御用金割当てに反対することに始まる。野田村の有志四人が首謀者となって地域に呼びかけ、三百余の同調者を得て二十一ヶ条の要求をかかげ野田代官所へ押しよせる。鉄砲、槍を得、一揆勢は数千人に達し、二十四日宮古へ乱入、この時、覆面武士十二人が計略を授けたので盛岡城をめざしたのを遠野城下へ変更した。一万二千人の大人数となった。ここで二週間野営し、横沢兵庫と鉄山支配人引渡し、御用金免除など二十五ヶ条の要求を藩に出した。事は幕府に聞こえ、横沢罷免、三閉伊の御用金全廃、藩主利済退隠となった。

この風説書は山峡の人々にどのような影響を与えたものかは検証できないが、地鳴りが十和田湖の彼方から聞こえて来たのである。

(2) 上目内沢村浅原平治

目内沢村は天文年間の津輕郡中名字に目内沢田とある古村、明治初年、上目内沢村、下目内沢として定着、それぞれ家数十二軒だった。南十五町で黒石、北十五町で本郷村、脇道で東根小道（乳井通）に出る。

浅原平治は庄屋、戦国時代の館主の後裔、彼は「土佐国満次郎漂流記」を書き写している。表紙に「万延元年九月書写し 浅原平治持主也」と書き、冊子の終りに「右漂流譚一卷好古の友人に送り売買をきんじ深く秘す」とある。

この末尾の文を誰が書いたものかは分らない。元の本にあったのを浅原平治がそのまま書き写したのか、または浅原平治が友人に別の写本を贈った際のことか分らないが、ともあれ深く秘すべき秘書が北辺の小村の庄屋の家で読まれていた。

中浜満次郎は十五歳の天保十二年正月七日、五人の仲間の共に鯉釣りの船で遭難、鳥島でアメリカ捕鯨船に救われた。アメリカ本土で教育をうけた満次郎は数奇な運命を辿り、十一年ぶりの嘉永四年正月帰国した。

この浅原本の終りに満次郎より六十年前におきた大黒屋光太夫のロシア漂流、五十年前の寛政五年の仙台藩の若宮丸の漂流記事もあるが、彼らの運命と満次郎とは天地の差である。浅原平治は日米和親条約も日米修好通商条約も、また桜田門外の変で大老井伊直弼が殺害されたことも耳にしておりながら、この漂流記をどんな思いで書き写し、なお「深く秘す」と書いたのだろうか。

また浅原家に「文久二壬戌六月京都表風説書」がある。この史料がどういう経緯で浅原家に納まったのかは不明である。恐らくは浅原平治が

書き写したものと思われる。

第一報は文久二壬戌年四月二十四日、薩摩松平修理太夫家臣西蔵右衛門差出しで、京都伏見の寺田屋に集合の過激派浪人鎮庄の報告である。八人相果てとある。

第二報は、松平土佐守（山内豊範）家臣若尾徳馬の報告で、四月二十二日内藤紀伊守への差出しである。内容は同藩の吉村郷太郎、坂本龍馬、宮地儀蔵ら六名が出奔のこと。

第三報は薩摩江戸屋敷退去のグループ名、このグループは寺田屋に集合した尊攘過激派で橋口伝蔵、益浦新八郎、町田元左衛門、弟子丸龍蔵、永山満蔵、西田某はかに久留米水天宮の真木和泉、熊本の本林唯七、また長州瑞島家から多数立退く報告。それらの情報のあとに島津久光の上洛に浪人どもが武器を携え、攘夷決行の勅許を期待している様、そして外国と戦端が開かれることにおびえる庶民の様相も報じられている。

第四報は福岡藩主黒田斉博が参勤交代の途上、播磨の大蔵台で発病、帰国したことが報じられるが、実は攘夷の志士平野次郎、伊牟田尚平が大蔵台で攘夷の意見具申を行って国元へ送還されるというアクションがあったのである。

第五報は大坂会集の浪士の名前が二十六名、この中で寺田屋関係で死せるものは橋口伝蔵、弟子丸龍蔵、西田正芳、田中河内介、田中左馬助、海賀宮門である。

これらの情報源についてこの史料は「右文久壬戌四月三十日京都屋舗知悉之者より文通写」とある。しかし何藩の京都屋敷かは不明である。

この「京都表風説書」はさらに將軍、関白、所司代などの意向も伝え

る。この中に登場してくる大野庄之助、安藤五左衛門について分れば風説書の発信元が突きとめられるだろう。

浅原平治がいつ、どのようにしてこの風説書を手に入れたか、また読み仲間があったのか、村人にどのように語ったのか、自分自身の思いはどういうものだったのか一切は不明である。しかしこのような、時代のもっとも鋭く、激しい姿をナマの形で伝えるものが上目内沢に存在していること自体、維新の鼓動が深くこの地に伝わっていること、そしてそれを受けとめた政治意識に高いものを感じる。

(3) 浅瀬石村北山彦作

浅瀬石村は戦国時代、南部氏の一族の千徳氏の城下町で天正年間には町屋七〇〇軒といわれた。慶長二年、千徳氏は津軽為信に滅ぼされ、江戸初期一〇八軒の集落となった。浅瀬石川添いである。

北山家は南津軽有数の大地主で庄屋である。明治三年の弘前藩田畑献上並田畑買入の際、二等の部で二五町歩献田、十一町歩買い上げになった。幕末から明治初年の当主は彦作（弘化二〜大正九）である。彦作はりんご産業振興の先覚者でもある。りんごは明治十三年より栽培、二十年には同志とともに南津軽郡山形村牡丹丹に共同果樹園を開き、同二十四年株式組織の「興農会社」を設立、その社長となった。また明治十三年より二十三年まで県会議員として県政に参画した。同家は南朝の長慶天皇の遺臣といわれ、彦作の長男儀正（明治九―昭和七）は家産を長慶天皇研究に捧げた。

同家より発見された幕末史料は次の六点である。以前はもっとと大量に

あったという。

⑦安政二乙卯年四月松前上知被仰付候ニ付仙台家江歎願之書付等御同家より公辺へ御届書写、⑧紀伊守殿宅にて掃部頭家来御書付御渡し、⑨文久二壬戌四月薩摩記 ⑩文久三癸亥年正月公儀御書付写、⑪慶応三丁卯年正月三日長藩知行高井英雄人数覚、⑫明治二年四月函館戦争従軍弘前藩士田中紀四郎の父宛私信二通。

次に個々に内容を説明する。

⑦の史料は松前藩が重臣松前主水と仙台藩の重臣片倉小十郎の親密な関係を利用して、上知取消運動を伊達藩に依頼したこと。そして仙台藩の三好武三郎が松前藩創設以来の歴史住民のかかわりなどから上知令は取消し、新城中心に北辺警備に専念させよと書く。

なお「青森県史 第三巻」には、三好武三郎に極めて似た名前の三好武五郎なる人物の記録が出ている。明治元年十一月十五日付の西館平馬より藩重臣宛の報告書に、元松前家臣当時清水谷殿に召抱えられた三好武五郎の報告書の項がある。

三好は清水谷が青森へ去る時に残って、松前城下の幕府軍の状況を探っていた。彼の報告では幕府軍の勢いは盛んで、津軽半島の平館への上陸が濃厚ということであった。弘前藩はこれによって警備体制、軍編成を整えた。仙台藩士三好武三郎と元松前藩士三好武五郎とはどういう関係だろうか。

④の史料は万延元年三月三日におきた桜田門外の変に関するものである。内容は四点に分れ、第一は事件後の老中の意向で、井伊家の動揺を心配し、三月五日に月番老中内藤紀伊守信親が井伊家公用人を召し、

「万一家動揺致候様之儀有^レ之候而は以ての外に付き、諸事公儀の御処置に任せ置」「跡々之義は厚き恩召も被^レ為^レ任候義に付」「一同安心」の旨を伝えた。

第二は事件直後の彦根、水戸二藩の殺気立った様を伝え、両藩とも藩士はもちろん、町火消・鳶人足・百姓も動員して武備を整えているという、三月十一日付の情報である。

第三は若年寄酒井左京亮の許へ集められた史料で落首も入っている。一例を挙げると

井伊首の ない水戸もない 井伊かも越 志めて隠居は 酒越呑み
第四は水戸家臣団の江戸出府への警戒である。彦根藩士との争いを避け、無用の緊張を避けるため水戸藩より幕府へ三十六名の氏名が届けられ、色々な事態への対策ものべられている。

この桜田門外の変に関する史料は何れも幕府御用所、つまり老中・若年寄ら幕府枢機にたずさわる人々の極秘情報である。それがなぜ北山家にあるのか不思議であるが、今のわれわれの想像を越えたある種のコミュニケーションが江戸末期から明治初年にかけて国民の間に確立していたと思われる。

③と④は両藩重臣の石高のついた名列表である。北の津軽でも維新のリーダーは薩長二藩という認識がゆき渡っていたのだらう。

⑤の史料はいうまでもなく文久二年六月、勅使大原重徳が島津久光援護のもと、勅諭をもって幕府改革を要請した時のものである。この時の状況をまとめてみると幕府はさすがに他の容喙で人事を沙汰することを厭って容易に承知しなかった。大原勅使が江戸城に赴くこと五度、そし

てついに薩摩藩の圧迫によって七月一日、將軍家茂は徳川慶喜を後見職に、松平慶永を政事総裁職に任じた。

同七月二十三日、大原は徳川慶喜、松平慶永を宿所に招き、酒井忠義が京都所司代を罷免されてなお京都に滞まることを咎め、新所司代本荘宗秀（前大坂城代）及び新大坂城代松平信古は何れも不適任ゆえ他に転任させること、和宮のため御守殿を造営すること、山陵修補のこと、京都の窮民賑恤のことなど十一ヶ条の実行を命じたが、この席に無位無官の島津久光が同席した。

もっとも大原の周旋した久光の官位叙任も薩摩藩主擁立も失敗し、失意で帰国の途中に生麦事件が生じたのである。

公儀書付の第一は先に水戸徳川家へ下した勅諭は井伊大老が邪魔したので改めて下すという松平春嶽宛の口達写し、第二は同じく松平春嶽宛の口達書で政治責任をとって將軍家を始め水戸中納言、幕閣一同官位一等辞退することだが、それに及ばずといい、第三は田安大納言のみは官位一等辞退・隠居よんどころなしという勅諭御書付写である。第四は勅使持参書付写で、神奈川仮条約については間部下総守が上洛して説明したが孝明天皇はなお心を悩ましており、「皇国重大之儀」ゆえ、大老・閣老・御三家・御三卿・家門・列藩・外様・諸代一同、群議評定し、公武合体で永世安全の途を講せよという。また一同に対し徳川將軍家を扶助し、内を整え、外の悔りを受けるなという天皇の意向を伝えた。

第五は攘夷布告の勅書写、「攘夷之念 先年来至 今日一不^レ絶夜患^レ之」よって幕府は攘夷に一定し、天下に布告せよと命じた。

第六は外夷侵入に備え、京都守備に各藩から「強幹忠勇 気節之徒」

を選んで親兵制度を早急に編成せよという口達写。

第七は上意御書付写で勅書に依えて將軍は明年（文久三年）二月に上京するので家門、列藩外様、譜代は策略を幕府に提出すること、また領国の武備を整え、しかも「無謀の所行無之様、銘々の家来下々江も」固く申しつけるというのである。

北山家所有文書でもっとも新しい時代のもは明治二年の函館戦争の際、青森に駐屯した弘前藩士田中紀四郎がその父に宛てた二通の手紙である。田中についてはその経歴、人物等について目下の所は不明である。ただし銃隊頭佐田大之丞と同格であるから小隊長の身分である。佐田大之丞は自由民権運動のリーダーの一人、佐田正之丞の父である。

明治二年四月八日夜に認めた手紙の中に、アメリカ人が幕艦大江丸を探索したところ二十人の賊徒が隠れていた。もっとも土分はわずか二人であとは小者ばかり十八人だった。彼らを青森へ連れて来たので佐田と田中の二人は一小隊を率いて受領し、腰縄をうって青森の常光寺にある函館府刑法局と外国方へ引渡した。しかし函館総督清水谷公考はすでに軍艦甲鉄に乗艦して平館沖にあった。外国人が間に入ることゆえ連絡が混乱し、大いに困ったとある。佐田は以前清水谷箱館府知事が青森へ退却してきた時に警備した、弘前藩銃隊頭である。

四月十日夜の手紙では雇米船ヤンシー号を中心とした各艦の動向と、乙部での戦況を報じている。各文面の末尾に二通とも母と祖母への心くばりがあり、微笑ましい。

なお田中について推理すると明治元年十一月十一日、清水谷府知事を浪岡に迎える際に編成した、青森防衛軍の第二等一小隊の隊長田中秀

蔵と思われる。

北山彦作が以上の史料をどのようにして手に入れたかは不明である。ともあれ明治に入ってから地域の指導者としての活躍ぶりや、豊かな識見はこれらの中央情報を充分にこなしたところによってつちかわれたと考える。『青森県人名大事典』は彼について次のように記述する。

弘化二（大正九）（一八四五—一九二〇）、南津軽郡浅瀬石村（黒石市）の人。大地主。農産の改良増殖に尽くし、りんごを副業として奨励した。りんごについては明治十三年から栽培、同二〇年同志と共に南津軽郡牡丹平に共同果樹園を開き、同二十四年株式組織の「興農会社」を設立、その社長となった。「興農会社」は藤崎町の佐藤勝三郎を中心とした「敬業社」が原型となった（注、敬業社は本多庸一、菊池九郎も株主で、彼らの門下生のプロテスタントグループが結成したもの）。明治十三年津軽郡農業資本米会議員、同郡連合会議員その他農業関係の要職に就き、同三四年には南津軽郡農会長に就任するなど斯界に寄与貢献、県農会、大日本農会から表彰された。一方、明治十三年から二十三年まで県会議員として県政に参画、また村においては教育に熱心で鳴海貞徳とともに小学校の創立者であった。なお、青森商業銀行取締役もつとめた。

(4) 馬場尻村の山口栄太郎

馬場尻村は黒石城下の北方。津軽郡田舎庄に所属す。村の北方を十川が流れ、中世末には多くの泡に囲まれていた。戦国時代、田舎館城の千徳氏の支配下にあり、天正十三年の南部氏津軽奪回戦の時、南部勢はここで多くの溺死者を出した。弘前藩領だったが明暦二年、黒石領の成立

とともに村は二分され、弘前藩領の西馬場尻（本馬場尻）と黒石領の東馬場尻（下馬場尻）に分れた。山口栄太郎家は弘前藩領の西馬場尻で、田舎館組の大庄屋である。

山口栄太郎が所持していた幕末史料は次の通りである。

⑦北亜墨利加合衆国王ヨリ日本国帝殿江呈之書札写 嘉永七年二月

⑧安政四丁巳年十月廿六日亜墨利加使節申立、同年八月廿五日於長崎魯西亜国布括延応接 共写 ⑨文久二壬戌年諸大名家臣出奔并水戸表風説書 ⑩慶応四新聞紙 壁書

⑦はいうまでもなく嘉永六年六月、東インド艦隊を率いて浦賀沖に現われたペリー持参の合衆国大統領フィルモアの親書訳。天皇宛の文書が半蔵そこそこで村々に出回っていることは時代が激変したことをよく物語る。それは次の④にもあてはまる。

④史料には安政五戊午年三月写し山口栄太郎と末尾に署名がある。この史料は老中堀田備中守正陸と米国総領事ハリスが江戸城西丸の老中役宅において行った対話書であり、本来のものは評定所一座以下に下して評議したもの。世上に流布したのは大名・旗本等に示したもので、若干省略している。

この中でハリスは合衆国大統領は日本を親友と思っており、領土的野心はなく、大君殿下（將軍）を大切に思っている。欧米はここ五十年間に大変化を来たし、蒸気船、電信機などが発明され、江戸とワシントンの間も一時間で応答できると説明した。合衆国は全世界と門戸を開いて自由に交易し、外交官をかわしたい。イギリスはアヘン戦争をおこし、日本とも戦おうとしている。フランスは朝鮮を狙っている。阿片は絶対

許してならない。合衆国大統領は日本人は世界の英雄と思っているなど細かくその意向を語った。そしてキリスト教については、信仰は全く個人の自由に属することを説明した。

山口栄太郎はこの内容を読み、何を感じたのだろうか。黒船騒動は黒石にもすぐに伝わり、江戸への応援隊や平内海岸警備の強化がはかられていた折の情報だから、一汐考えることが多かったであろう。

プチャーチン関係は、安政四年八月二十五日長崎において幕府の外交担当者水野筑後守・荒尾但馬守・岩瀬伊賀守（忠震）がプチャーチンと対話した時の記録である。

露国海軍中将プチャーチンは嘉永六年七月、ペリー来航に刺激されて軍艦バルラダに座乗し、三艦を率いて長崎に来、国書の受領を求めた。国書には和親修好と国境確定のことがあった。プチャーチンは十月二十三日一旦退帆し、十二月五日再び来航、長崎で幕府代表川路聖謨らと交渉、翌安政元年正月八日、クリミア戦争によって妥結せぬまま退去した。この後、幕府は再航したペリーと安政元年三月三日和親条約を締結した。

プチャーチンは三月二十三日再び長崎に来て前回の要求を繰り返し、八月三十日、軍艦ディアナ号で箱館に来、次いで大阪湾天保山沖に碇泊した。英艦を避けての行動だが京都の驚きは大きかった。十月下田に回航し商議中の十一月四日大地震があり、その津波のためディアナ号が破損、やがて沈没した。船は戸田村で新造にとりかかり安政二年三月十八日完成、プチャーチンはその間に締結した「日本魯西亜国修好通商条約」を収獲に去った。この時の洋式造船が君澤型で、我國の造船界に革命をおこした。

プチャーチンと幕府とはこのように長い交際のある間柄であるが、幕府はまだ通商貿易は許可せず、プチャーチンはオランダ並の貿易を要求し、安政四年の会談となった。この時プチャーチンは英・仏・印度を主としたアジアの国際情勢、軍事状況、地理さらに日清貿易、漁業問題、カラフトの国境問題、軍船の入港問題、蒸気船の構造、さらには黒海やアムール河などのロシア紹介など多岐にわたって説明している。

⑨史料は水戸、鹿児島、仙台、熊本、萩、岡山、柳川、二本松の八藩の脱藩者が約百六十人位という報告。そしてこの出奔人（いわゆる志士）に対して中川様（この人物不詳）が浪人を集めて自分の在所に置いていること、西国大名、有力大名が参勤交代を怠っていること、とくに西国では戦争への対策が立てられていること等がこの文久二壬戌年の書付に書かれている。

また長文の「水府表風説之書」は文久元年十一月七日付のもの。水戸藩の気風を桜田門外の変や東禅寺事件で説明し、徳川斉昭の果敢な施策、臨戦体制、そしてそれらは遠く徳川光圀の弘道館や剣道所創設以来の成果であること、さらに目下、漆、桑畑を薬草畑に代え、農民も配慮されながら農兵隊に組織され訓練を続けていること、などが細かに書かれている。

このせいか、文久年間、弘前藩も農兵隊の組織にとりかかっている。江戸でフランス兵法を学んだ本郷村の豪農鎌田勘三郎は浪岡組、増館組、常盤組三組農兵隊長として戊辰の秋田口戦争に登場する。彼は戦死するが鎌田家はのち自由民権運動の一拠点となる。

なおこの⑨史料は御本家（弘前藩）本多殿（庸一の父東作か）より黒

石藩家老が借用して藩主へ見せていたものを、山口栄太郎がさらに借りて写したとある。

⑩壁書は奥羽総督府が慶応四年三月二十三日仙台藩を先鋒とした討会の勅令を出したことに對し、それまで謹慎謝罪の意を表していた会津藩が薩長私に政權を弄するものとして、奥羽越の諸藩に自らの友情を吐いた誓文である。大義名分論と五常五倫の儒教倫理で討幕軍を批判し、薩長と勤王公卿を君側の奸としている。この誓文回付と総督府の世良修蔵らの暴逆的行動は、ついに奥羽越同盟結成となった。

それにしてもこの回付が印刷され、村々の庄屋達に読まれているということは、もはや民衆の協力を得なければ藩政の決定も見通しもしえないということであろう。この文書は慶応四年三月十五日のものだが、弘前藩では二月二十八日農兵隊の秋田口出動を決定した。

C、義民藤田民次郎碑建立運動

近世の津輕は十八世紀半ばまで新田開発が進み、藩士の帰農化など藩の重農政策もあり一方的な収奪による農村の疲弊や荒廃は比較的少なく、南部藩のごとき百姓一揆の頻発はなかった。

しかし十八世紀末、天明の大飢饉などによって藩財政は大打撃をうけ、次いで蝦夷地警備の負担が加わり農民の負担がわずか三十年の間で三倍という状況になった。そして文化七年の十万石昇格にともなう出費なども重なり、ついにそれまでの個別的・消極的な逃散、訴願から各組連合の強訴という手段がとられ、一部に打ちこわしも発生するようになった。

かくて文化十年（一八一三）秋、隠し田摘発をきっかけとし、駒越組
4ヶ村や猿賀組の強訴計画、大光寺、尾崎組の代官所強訴、そして九月
二十八日、藤代・高杉・広須・木造新田四組の農民二千人による弘前城
亀甲門襲来という事態が発生した。この成果として減税は認められたが、
弱冠二十二歳の高杉組鬼沢村の庄屋藤田民次郎は首謀者として逮捕され
斬罪となった。

この義民民次郎は逮捕直前に妻子と離別しているため家系は絶え、独
峯了身信士として霊界に化した。そして藩政時代は表立って祭祀を継ぐ
ものはなかった。しかし津軽にも自由民権運動の火が燃え上った明治十
四年三月、ついに民次郎復権の運動が鬼沢や周辺地区を中心に始まった。

その時の廻文や趣旨状は次のとおりである。

弔藤田民次郎靈建碑有志協議ノ廻文

中津軽郡鬼沢村莊屋藤田民次郎ハ文化 年 月 日弘前藩ニ罪ヲ得テ
斬首セラル 然シテ罪ノ如何ヲ探求スレハ一家一身ノ為ニ非スシテ当
村ハ申ニ及ス遍ク各村ノ農民ノ為 痛苦艱難ヲ傍觀スルニ忍ヒス 百
方其難困ノ次第 手代代官奉行等マテ陳述セシトイヘ共豪モ不被容刺
其情願ヲ述ル事ヲ得セラシムルニ至ル 於爰ニ不得止家老用人及ヒ藩
主公ノ上聞ニモ達センコトヲ志シ各村ノ莊屋重立及ヒ有志ノ徒ニ協議
ス 然ニ他村ノ莊屋重立ノ中 此願書ヲ案シ報策スルナシ 民次郎將
ニ年齢二十五 志操清潔 慷慨才智アリ 案ヲ下シ筆ヲ執リ 逐ニ衆
ヲ牽テ弘前ニ至リ 是カ為メ貴賤男女東西叫ヒ一城為ニ震動ス
民次郎旧城内ニ不可入宜シク謹慎城外ニ有テ願意ヲ上聞ニ達セント
藩主公大目付山本三郎左衛門郡奉行工藤忠司ヲシテ願書ヲ受取ラシメ

民次郎ニ命ヲ下シテ曰 情願ノ趣三郎左衛門聞届タリ 退テ再ヒ命ヲ
待ヘント 因之民次郎數千人ノ衆ヲ牽テ各其居村ニ帰ル 藩主公民次
郎ノ不敬ニシテ俄ニ衆ヲ牽テ強願セシヲ怒リ逐ニ下シテ斬セシム
嗚呼何ソ夫レ悲痛ナルヤ 然トイヘ共藩ニ典刑アリ之ヲ免ニ由ナシ
民次郎モ亦万人ニ代リテ一人死ニ就クヲ榮トス 敢テ憂レス憤ラスシ
テ從容命ヲ受ケ死ス 又何ソ壮ナルヤ 烈ナルヤ 爰ヲ以其情願ノ幾
分カ允許セラルルヲ得又当路官人賄賂ヲ貪リ民情ノ不察ヲ警戒スルニ
至レリト 抑此情願ハ松前蝦夷地ノ警衛年々歳々郷夫數百人渡海シテ
洪寒痛冷ノ為ニ絶命スルモノ數百人 之カ為メニ各村恟然 又幕府ノ
官人諸藩ノ警備人數等 年一年ヨリ往来繁ク其困苦不可言又加ウルニ
賦課金莫大ニシテ民力艱難時ニ亦年穀不実ニシテ農民菜色等アリテ苟
モ一村ノ首長タルモノ坐視傍觀ニ不忍ヲ以テ此舉動ニ及ヒタルモノナ
リ 雖然民次郎ハ案文執筆ノ罪アリ又山本三郎右衛門ノ前ニ出テ論弁
抗議セシヲ以テ巨魁ノ名ヲ被負 空シク九泉ノ一鬼トナレリ 按ニ從
容死ニ就クトイヘ共其冤恨不消滅カ 昔時総州佐倉ノ莊屋惣五郎ハ藩
公ノ苦政ヲ徳川大將軍ニ直訴シテ其情願ヲ逐ルトイヘ共逐ニ斬ニ処セ
ラレタリ 然ルニ其惣五郎カ靈魂屢々変ヲナシ又各村ノ農民其壯烈ニ
シテ從容死ニ就ヲ以テ之ヲ一社ニ祭レリ 後藩公モ其靈慰セン為メ之
ヲ祭り号シテ惣五大明神トス 維新後郷社ニ列セラル
抑民次郎ノ靈タルヤ人之ヲ祭ルナリ藩之ヲ慰セス 爰ヲ以其冤靈婦
スル処ナリ或ハ曠野ニ吟ヒ或ハ道路ニ徘徊セシコトモ古今其例アリ
豈ニ心情アルノ人何ソ夫レ悲マサランヤ何ソ夫レ其德ヲ報セサルヤ
今ヤ文明ノ世其例多シ 俯テ願クハ予等ト同意ノ諸君 其父祖ノ昔日

ニ志ヲ同シ行ニシタルヲ追憶セラレテ今般多小ノ金円ヲ寄附シテ其靈魂ヲ幽冥ニ慰シ其業績ヲ永世ニ伝フコトヲ 斯レハ民次郎ノ靈其帰スル処アリ 其慰スル処アリテ今ヨリ後必ス英靈モ感應保護スル所アラシカ 謹テ之ヲ四方有志ノ諸君ニ稟謁ス

明治十四年三月

發起人 久保 連

右 全

右 全

さらにより具体的な計画をもつて明治十六年二月次の趣意状が津輕一帯に回された。「鬼沢村山口民次郎氏の慰魂報徳之碑石建立之主意之条々」の一部から

一、是迄七十余年間に上様之御刑法に上様を憚り奉り同人の墓石又靈魂祭祀等も不仕候故其靈時機に寄り崇りをなす事不少候、必竟は各村之數千萬之為、方に落命候処また一向報恩徳之驗相立不申故尤之次第と奉存候事、

一、和漢西洋古今共にかかる人の靈魂を祭り候へば其靈驗有之候、朝敵とさへ相成候純友、将門、義経、為朝其他の人々さへ靈驗御座候、況んや左様の大悪事等仕出したる人に無之に於てや、是等は古今の記録等に詳に有之候事故今更申迄も無之候、

一、民次郎之為に同罪之科を通れたる人々者更なり、其子孫は必ず同氏の靈を祭り遣し可申儀条理に於ても情實に於ても難默止儀と奉存候、近世朝敵と相成候藩々の人々及明治十年之大朝敵西郷氏以下に於ても皆々立派之石碑建立相成丁寧に祭祀候事、

朝廷に於ても御許に有之候其外大久保卿を殺したる人々岩倉公に

対して大失敬の人々其他久留米之藩士、黒田之藩士、雲井竜雄又は水戸之両党之人々、上野戦争の朝敵彰義隊、箱館之脱賊等迄も立派之石碑建立祭祀有之候事ハ遍く人々之知所ニ有之候、夫へ比べ候へば民次郎ハ一国人民之困窮之事件哀願ニ出候迄にて御座候へば惡意惡謀ハ露斗も無之候へ共、御国禁之条を不相守大勢之人々引まといひ御城下迄罷上り候儀ハ上様へ奉対無此上無調法故ニ御座候、是は必竟また人智未開之時代にて然も下情上達せざる事を人民共強く上達せんとの一途の過誤に出でたる事と又は郡奉行御代官をはじめ早速聞付説諭或ハ取鎮め呉不申、如此重大之事件に立至候事にて実に何共愍然遺憾絶言語候事共にて御座候、乍併右四ヶ組計ニ無之東根通り各組にも同断之事有之候、但天明三四卯辰之騒動ニ引比べ候へば雲泥之違にて一粒一金も他より掠め侵取候様之事無之候、此故ニ上様にても殊外御惜被為候との事洩聞え申候（下略）

この時は下沢保躬と鳴海証吉による碑文、高山文堂による隸体の碑文字、碑の大きさ、發起人として鬼沢の鳴海証吉、小山平作、奈良宗作、浪岡の阿部政太郎などが揃って全県的な事業に発展させようと明治二十一年まで努力したが結局失敗した。その失敗の直接の原因は不明だが、鬼沢において明治十四年に運動が盛り上り、十六年に具体的な計画を立てて運動しながら明治二十一年に至って失敗したのは、津輕における自由民権運動の一つの姿と考えてよいと思う。

なお、藤田民次郎の顕彰は第二次世界大戦後の昭和二十年代末から三十年代にかけて、つまり民主主義日本において全県、全国的に行なわれたのだが、その陰には地元に生まれた一教師、須藤水甫の四十年以上に

及ぶ努力があった。

D、五所川原事件

往年の文士薄田斬雲は終戦前後郷里の弘前に疎開して来て、昭和二十四年「希望の弘前」という小冊子を著わし地元の奮起をうながした。その中で自由民権運動に活躍した政党人のことにふれ、とくに明治二十三年、条約改正問題渦中の大隈邸へ忍びこんだ小山勝次郎と明治二十四年の五所川原事件の奈良誠之助については特筆している。

彼らは弘前城内で回天社を結成、菊池九郎、本多庸一らの自由民権運動はなまぬるいと批判した血気の激派であり、のち弘城政社の組織をもって青森県政を壟断した。

五所川原事件は明治二十四年八月二十日の青森県会議員選挙の際、五所川原において自由派・反対派相半していたので自由派の勝利のため反対派の郡会議員佐々木嘉太郎らを殴打したというもので、最終的には無罪となったが、血気の自由民権家の姿を知る一好材料。被告十七人の中にはのちの代議士阿部武智雄、弘前市長小山内鉄弥、石郷岡文吉がおり、他に政客奈良誠之助、斎藤武美、蒔苗寅五郎、土岐孝之進、富士連城、奈良平雄、木村喜代太郎、宮館政次郎、太田勝太郎、藤田恵助、宮館巳之吉、菊池三次郎、船水弥吉がおり、個々に調べると面白いと思う。

奈良誠之助については次のように書いている。「奈良誠之助氏は慶応初年、弘前鷹匠町に生れ、祖父佐衛門氏は剛直を以て鳴り、笠原騒動の際、勘定奉行にあり、敢然笠原に反抗して藩の忠臣と言はれ、その為に

自裁し果てたとかいふ。誠之助氏は此の祖父の遺風を受けて剛勇の資、身材長大弱冠にして弘前城址内に回天社を設けて青年の牛耳を執った。

回天社は藤田東湖の回天詩の旨意をとった名称で、氏は幕末の総帥と言はれた東湖に私淑し、其の書風を学び、雄渾な書体を能くした。廿歳の頃、全国周遊、遠く九州鹿児島に遊んで南州の霊を弔ひ、長谷場純孝の処に三ヶ月も滞在し、去って熊本に入って佐々友房の家に留ること一ヶ月、其間九州各地の志士と交遊、帰途には、徳富蘇峯、河野広中、星亨等を訪ふてその雄偉の風姿と風発の雄弁とは対者を驚かした。帰郷後弘城政社を作って同志を統合し、その総帥として青森県下を圧した。かくして多年政界に活躍し、帝国議会に進出すべき予定であったが、不幸早世した事は実に惜むべし。」

彼の抱負気魄は、半紙二十枚綴に毛筆細字で書いた五所川原事件の「投獄記事」が証している。

終りに

恩師宮崎道生先生が古希の寿を迎えられた。仰ぎみる高いご人格とその深く充実した白石研究にうたれるのみ。思えば昭和二十五年春から四十年に及ぶ長いご薫陶に報ゆること、甚だ薄きをたゞ恥じるのみである。私の陸羯南にせよ、安藤昌益にせよ、はた自由民権運動にせよ、先生が求められる徹底研究には程遠い成果である。慚愧に耐えない。

しかし日暮れて途遠しの感はあるが、この度の先生古希の寿を記念に思いを新たにしてお報恩の道を歩みたい。貧しくても成果の一つ一つを先

生にお捧げしたい。改めて宮崎先生のいつまでもいつまでもご健勝であ
られることを祈念申しあげます。

（青森県立黒石高校教諭）